

研究ノート

藤雅三《破れたズボン》発見報告

高橋 秀治

はじめに

- 一、発見の経緯
- 二、藤雅三について
- 三、作品の現状
- 四、ジョージ・ワシントン・ライニンガーについて
おわりに

はじめに

作品が描かれてから一二〇年の歳月を経て、我々日本人の前に現れた藤雅三の一八八八年フランスサロンの入選作《破れたズボン》(図1)、この藤雅三の代表作の発見に結びついた経緯と作品について誌面を借りて報告したい。

作家名 藤雅三

作品名 破れたズボン *Torn Trousers or In Disgrace*

制作年 一八八八年

寸法 一八二・九×二四三・八cm (額寸 二二八・〇×二八〇・〇cm)

所蔵 ジョスリン美術館 (ネブラスカ州オマハ)

Joslyn Art Museum, Omaha, Nebraska

原題等 Fouji (G.), *Pantalon déchiré*, Paris Salon 1888, No. 1020

日本近代洋画史のなかで藤雅三の名前は明治政府が西欧の技術移入を意図した工

藤雅三《破れたズボン》発見報告

部美術学校で外国人教師に学んだ初期洋画家のひとりとして知られている。もちろん工部美術学校へ入学する以前に、郷里の大分で陶器の絵付けや南画を描いていたこと⁽¹⁾、国沢新九郎の彰技堂画塾で学んでから工部美術学校へ入学したことは記録されているが、なにより日本近代洋画に重大な影響を与えることとなる黒田清輝を山本芳翠とともに美術の道へと導いた人物として記憶されている。明治初期にフランスへ渡った美術家はさほど多くはないが、そのほとんどは帰国すると洋行帰りの画家として一家を成した。県立美術館が各地に開館したこともあり、また明治美術学会のように多くの研究者の発表の積み重ねによって、それぞれの画家の調査研究が進んでいる。藤と同時期にフランスに学んだ山本芳翠など、以前にも増してその作品が探し出され、書籍などでも紹介されている。しかし藤雅三については、名前は知られているものの、彼の活動の実態の調査とその位置付けは近年までなされてこなかった。なにより彼の作品自体がほとんど知られていない。その最大の理由は、日本に帰国しなかったことと、フランスで制作した作品が遺されていないことにある。彼は帰国しなかったどころか、フランスからアメリカに渡ってかの地で没してしまつたことにより、一層その芸術活動を知ることが難しくしてきた。

しかし近年、瀧井直子氏がアメリカでの藤の活動について目覚しい調査と研究を進め、報告されている⁽²⁾。それによりアメリカに渡ってからの活動の中心であった陶磁器制作のデザイナーとしての成果と出版物の挿絵制作が解明されてきている。また、藤の名前が従来呼ばれていたような「まさぞう」ではなく「がぞう」であることも明らかにしている(ただし、海外で外国人に呼びやすいように呼び名を変えていたことも可能性としては残る)。

さて彼のアメリカに渡るまでのフランス時代の制作活動はどのようなものであつたらうか。これまで唯一、藤の油彩作品として知られてきたのは、東京国立博物館所蔵の《フランス風景》(挿図1)であった。この作品をフランス留学後の典型作と位置付けるならば、彼が温和な外光派のラファエル・コランに学んだことから、コランに学んだ以降は外光派風の風景表現をしていたのではないかと想像することも可能であった。しかし実際のところは比較対照できる作品さえなく、フランス時代の表現についての研究も進んでいなかった。今回、筆者が偶然にもバリ時代の代

挿図1 《フランス風景》 東京国立博物館蔵

表作をアメリカに発見したことは、今後の藤の研究を進めるうえで重要な資料を提供できるという点で意味を持っているといえるだろう。

一、発見の経緯

それは昨年の五月、一通の電子メールから始まった。以前愛知県美術館で国吉康雄展を開催したおりに文献についての多くの情報提供の協力を得た国吉の研究者小澤律子氏から、「自分の友人であるアメリカ人から、ある日本人の作品について問い合わせを受けたが、見当がつかないので、協力してくれないか」というものであった。協力する旨を伝えると小澤氏から紹介を受けたそのアメリカ人＝美術館の学芸部長から間もなくメールが届いた。

ネブラスカ州オマハにあるジョスリン美術館に着任して間もないそのジョン・ウィルソン氏は、「日本人の作品として伝わっている作品があるが、その日本人や作品について何かわかることはないだろうか」ということであった。その時点ではウィルソン氏もまだ実作品を見てはいなかった。というのは、随分以前からその

作品は屋根裏部屋のような奥深い所にしまわれていて、大きいため引き出すことさえままならない状態であったというのである。ウィルソン氏は、美術館の作品を見直している最中で、この作品の記録が気にかかっていたのであった。所蔵品の見直しをして、展示に生かせないかと考えてはいたが、いったいどのような画家の作品であるかわからぬままに展示をするわけにもいかず、日本人の友人である小澤氏に助けを求めたのである。小澤氏からは *Torn Trousers* 別名 *In Dignity* という作品名、「G. Foyi」という作家名と、制作年一八八八年という情報が寄せられた。さらにウィルソン氏からは、作品が美術館の所蔵となった経緯とサロンのリスト番号「1010」と作家名「FOUJI (G.)」、原題 *Pandion dechire* も知らされた。藤の研究者であればこの時点の情報だけで藤雅三のことと分かったことだろう。ウィルソン氏は、ジョスリン美術館のライブラリーには一八八八年のサロンのカタログがないので、その確認もできていないということであった。そこで私はまず一八八八年のサロンのカタログを確認すべく旧知の岐阜県美術館の山本敦子氏に当該ページのコピーをお願いした。岐阜県美術館はその開館記念展（一九八二年）に岐阜県出身の山本芳翠と当時のフランス画壇を紹介する展覧会を開催しており、資料として当時のサロンのカタログも収蔵していた。私は岐阜県美術館開館時に在籍していたこともあって芳翠の留学時代の関連ある作品の可能性も考えていた。

一八八八年のサロンの出品目録にあたってみると、果たして出品番号一〇二〇の *Pandion dechire* という作品名が FOUJI (G.) という画家名で掲載されているのを確認することができた（挿図2、3）、しかし、入選作にその名を見つけ確認することはできたが、残念ながら図版は掲載されていなかった。写真図版を載せる技術がまだ発達していなかった当時のカタログは、画家とは別の職人が油彩作品を版画に写して掲載する方法がとられていたようで、図版として掲載されるのは入選作のごく一部にすぎなかった。実際入選作が絵画だけで二千点を超えていたので、それも無理からぬことと感ぜられる。ウィルソン氏からは古い記録写真と思われるモノクロームの画像が送られてきた。これまで藤雅三は「ふじまさぞう」として知られてきたために、筆者は「G. Foyi」の「G」に引っかけかかって Foyi = 藤雅三にすぐには結び付けられずにいたが、その読みから半信半疑ながら藤に的を絞って資料を探した。

途中で黒田の藤に関する回想文があったのを思い出し、確認してみるとその記述とアメリカから送られてきた画像の内容とがぴったりと合致し、思わず声をあげてしまった。藤雅三がサロン入選を果たしたことは、これまでも知られていたことではあったが、それがどのような作品であったかは、下記の黒田の回想をたよりに想像するしかなかったのである。まず黒田は藤との出逢いを回想して「私が画家にな

挿図2 1888年のサロンの出品目録

ったのは、半ば藤君の導と言ってもいい、藤君を知る前には画家にならうと言ふ様な考へはなかつた藤君がバリーに來られて、藤君の為にコラン先生の所に通弁の意味を以て出入りを仕初めたのが私の画家になる動機であつた⁽³⁾と述べている。ほかに黒田がコランを追想したなかで、藤雅三がコランのサロン出品作《花月（フロレアル）》を見て感服し入門した⁽⁴⁾という話をしているが、《花月》が出品されたのは、入門した後の一八八六年であり、これは黒田の記憶違いか、あるいはあえて出逢いを強調するための意識的な表現だったのかもしれない。

そして、藤のサロン入選作については、「随分苦学した。そうして勉強家であつた。困つて居る中にもサロンの出品画を製作したことがあつた。その画は藤君が小さな間借りをしてをつたその家の門番の夫婦か何かをモデルに頼んで描いたものだつた。子供がズボンを破いて来て御母さんに叱られてゐる、その傍に親爺は子供を見つめて、黙つてゐるところの図で、画題は「ズボンの破れ」とか言ふので、横は一問半もある大作でありました。私が二十二三の頃かと思ふ、この画がサロンに及第しました。然し賞は貰はれなかつたやうです。そうして亞米利加人が買ったと言ふことを聞いてをります⁽⁵⁾とある。

この文章から読み取れるのは、(1) 人物(父母と子供)が描かれていること。(2) 作品名は「ズボンの破れ」であつた。(3) 横の大きさが一問半ほどある。(4) 入選のみで特に賞はもらっていない。(5) アメリカ人が購入した。ということである。つまり風景画ではなく人物を主体とした作品でかなりの大きさをもち、アメリカ人に買われたというが、残念ながらその作風までは踏み込んで言及していないので、コランとの影響関係などは明らかではない。大きさの点は師ラファエル・コランの同年のサロン出品作《晩夏》が横四メートルをこえていたことから比較すれば、特別大きいわけではない。アメリカ人が購入した点については、二〇世紀の前半まで、アメリカ人にとって文化的な伝統のないアメリカの作品より、ある種のコンプレックスとしてヨーロッパの美術、文化をありがたがる風潮が根強く、経済的に豊かになつた地方の金持ちがヨーロッパから持ち帰つた美術品などをそれぞれの地元へ還元しようとする動きが各地でみられたこととの関係を感じさせる。今日でもアメリカの地方都市を訪問すると、そのような個人コレクションを土台に作ら

挿図3 同 掲載箇所

れた美術館が数多く存在している。もちろんすべてがヨーロッパ美術を中心としているわけではないが、ひとつの典型として、今の言葉でいうところのメセナに自分の出身地である地方都市に伝統ある文化を根付かせたいという使命感から驚くほどの勢いで収集している例が多い。この点については、藤を研究されている瀧井直子氏が、東京文化財研究所での定例の研究会でも指摘されたところである。つまり、藤の作品を購入したアートパトロンのアメリカ人は日本人の作品として購入したというより、典型的なサロンの出品作として選んだら、たまたま日本人画家の作品であったということである。

二、藤雅三について

前述したように藤雅三は、黒田清輝という画家の誕生に深く関わった人物として知られている。黒田が法律を学ぶためにパリに赴いたおりに、フランス語が得意ではなかったといわれる藤雅三のために通訳としてラファエル・コランのアトリエに同行したのをきっかけに、藤や山本芳翠の薦めにより、生来、美術に興味を持っていた黒田は絵画の道へと歩みを進めることとなった。黒田自身が藤の計報に接して、『美術週報』で語ったように、黒田がコランに師事するきっかけを作ったのは間違いないだろう。ただこれまで藤の存在はそれ以上のものにはなっていない。それは、藤が画家としてみるべき技量を備えることができなかつたということではない。パリでラファエル・コランに師事した後、アメリカに渡って日本に戻ることはなかつたこと、そして陶磁器の意匠デザインを生業として絵画の制作から遠ざかったことで、藤の留学後の作品を見ることができないことによる。

藤の作品のうち知られているものは、東京国立博物館所蔵の油彩《フランス風景》以外の作品では、故郷の大分県立芸術会館に収蔵されている《歳寒仙侶図》（挿図4）などの花鳥画を描いていた時代の作品である。《歳寒仙侶図》は図版を見るだけでも工部美術学校へ入学する前にかんがりの日本画の技量を備えていたことが分かる。そのためにかえってフォントナーからは日本画の癖が抜けないために指導を受けたというのもうなずける。

さて、藤雅三がパリのサロンに入選するまでを復習しておく、藤雅三の生家は

白杵豊家町五番地。父は嘉八、母はテルといい一八五三年（嘉永六）三月十五日に長男として生まれた。戸籍では藤雅藏であった。幼名をキノキチ。白杵の庄屋で造り酒屋の四男で田能村竹田に学んだ南画家帆足杏雨に早くから学び花鳥画に優れ、前後して地元の民陶の絵付けに従事したということ郷土史家が記述している。一八七四年（明治七）、義兄の嘉市から家督を譲り受けたが、二年後には上京をして、上京後は一八七六年（明治九）一〇月、国沢新九郎の彰技堂画塾に入門。さらに翌月の一月に工部美術学校に入学を果たした。松岡寿の回想ではフォントナーからは日本画の癖が出るので叱られたという。しかし、のちには二六人中七番（明治二年七月大試験進歩等級表）と成績を上げている。一八七八年（明治一一）、フォントナーが帰国、後任のフェットレイに不満の小山正太郎、浅井忠、松岡寿らは退学して、十一会を結成したが藤雅三らは残る。サン・ジヨヴァンニに人物画を学んだ。一八八三年（明治一六）、工部美術学校は廃校となり、藤以下一三名に修行証書が与えられる。藤は工部省に就職する。一八八四年（明治一七）ころに久米桂一郎に絵（擦筆画）を教える。また洋行費用を作るために半身像を二十数枚描いたという。一八八五年（明治一八）二月にフランスに渡り、前年に渡仏していた黒田清輝と出会う。このころラファエル・コランに弟子入りする。翌年、山本芳翠と美術商の林忠正とともに、黒田に絵の道に進むよう勧める。久米桂一郎が渡仏し藤の導きによりコランに入門する。また、黒田清輝もコランに絵を習い始める。一八八七年（明治二〇）、イタリア留学を終えた松岡寿がパリに来て、藤のすぐ近くにアトリエを借りる。一八八八年（明治二一）、《破れたズボン》がサロンに入選する。

挿図4 《歳寒仙侶図》
大分県立芸術会館蔵

このようにしてみると、藤雅三は黒田をはじめ同時代の画家といろいろな場面で交流をしていたことがわかるが、このあとフランス人と結婚をし、アメリカに渡ったことで、画家仲間とも疎遠になってしまったのである。

疎遠になったことについて黒田は、「藤君はパリを去つて、亜米利加に行つた。去る前に仏蘭西の女と結婚した。でその結婚前までは私と久米と藤といふ間は兄弟同様の間でやつて総て遠慮なく話し合つてををつたが、結婚すると間もなく亜米利加に行つて了つたと云うことを聞いたが、その後はハタと遠ざかつて了つた。藤君はあれまでに親しくしてゐた吾々にさえ何の話しもなく、公使館あたりへも何の音沙汰もなく仏蘭西を去つてしまつたのである。以来全くその音信もなければ、無論逢つたこともない」と、すっかり音信の途絶えてしまつたことを述べている。

三、作品の現状

さて筆者はその後、ジョスリン美術館を訪問し、藤雅三の作品《破れたズボン》を収蔵庫で熟覧し、関連資料も閲覧させてもらう機会を得た。それにより、この作品が辿つた詳しい来歴と作品を購入した人物について知ることができた。また、ウィルソン氏と面談し、この作品に対する考えも聞くことができた。

ウィルソン氏に案内されて入つた収蔵庫のラックに立てかけられていた作品は、予想以上に大きく感じられた。写真ではわからなかつたサインの部分も年記とともに「G. Fouji 1888」（図4）と読み取ることができた。描かれた情景は黒田が述懐したように叱られる少年とその両親が確固たる筆遣いで描かれていた。黒田の記述以外では、壁際に横たわつて少年を見る犬、床に置かれた帽子、棚の上の瓶と器、テーブルの上のはさみやコップ、壁にかかる日めくりなどの小物が目についた。窓から入る光が逆光の中にうつむいて立つ少年の頭を照らし、頬はやわらかな反射光に照らされている。一方母親の額には強い光があたり、眼を鋭く光らせている。半分影の中に沈む父親も片方の眼には光が宿り、少年と対峙する両親の立場を強く主張しているようだ。壁際に座る犬だけが心配そうに少年を見遣っている。全体として物語性の強い絵作りはきつとこの絵を見た当時の人々に強い印象を与えたことだろうと想像できた。

ウィルソン氏の話では、「まず修復をしたいが金がない。日本でどこか出してくれるところがあるとうれしい」「作品を売却することは来歴からして考えられないが、古いものでも新しいものでもこだわらないが日本の美術館が所蔵している日本の作品と長期（たとえば五年）の作品交換展示プロジェクトなどは、考えられる」ということであつた。つまりこのプランは以前の国吉康雄の作品を交換展示したプロジェクトを下敷きにした案であつた。ウィルソン氏は以前シンシナティ美術館に勤務していたときに、所蔵作品である国吉康雄の代表作《デイリー・ニュース》を岡山市のベネッセ・コーポレーションが運営していた国吉康雄美術館所蔵の《鯉のぼり》という作品と八年に亘る長期の交換展示をする事業を行つた経験を持つていたのだ。

修復についても話題とされたので、筆者はアメリカ滞在中に知人で修復技術者でありデラウェア州ウィルミントンにあるウインターツール博物館の保存責任者およびデラウェア大学のアイルミントンにあるウインターツール博物館の保存責任者およびス・ストーナー博士に作品の写真などを見せて意見を聞いた。それによると「裏打ちをする必要がありそうだが、これだけ大きなホットプレートは新たに作らないとないだろう。根本的な保存処置のためには二年ぐらいかかるかもしれない」と言われ、「オマハに近い地域にいる自分の教え子の修復者が作品を見る機会を作ることが出来ればよいのだが該当者が居ないか調べてみる」ということであつた。しかし、筆者自身が実際に見たところでは、ごく一部に擦り傷はあつたが、それほど悪いようには見えなかつた。画面全体に経年変化による細かいひびは認められるものの、剥落の心配のあるような浮き上がりなどは観察できなかった。しかし、裏蓋のかかつていない木枠の端の部分にあたるカンバスは、それなりに劣化し弾力性がかなり失われているようにも感じられた（挿図5）。また最近つけたと思われる裏蓋のために作品裏面は観察できなかつたので、裏面からの観察で何か重大な問題が発見される可能性がないとはいえない。

四、ジョージ・ワシントン・ライニンガーについて

藤雅三の《破れたズボン》をアメリカにもたらした、収集家ジョージ・ワシントン

ン・ライニンガー (George W. Linniger 一八三四―一九〇七、挿図6) について、今回の訪問で分かったことも報告しておきたい。

ライニンガーは成功した実業家であり、アートパトロンのパイオニアであり、政治家、慈善家で中西部の田舎町オマハの文化的な歴史の中では欠かすことのできない存在であった。一八三四年にペンシルヴェニア州チェンバースバーグに、農場と仕立屋を営んでいた父と元教師の母の間に生まれた。ドイツ系の父親から聞いた中世の城や堀、ドイツの貴族の話などから冒険を夢見るような少年時代を送ったという。一四歳の時に父親はイリノイ州に移住し、そこで金属製品の事業を始めた。ライニンガーはその事業を手伝い、二〇代になって海軍に入隊した。除隊後の一八五六年、ライニンガーはイリノイ州ノックスビル出身のキャロライン・ニューマンと結婚。ふたりの子供をもうけた。イリノイではライニンガーは健康を損ない、医師の助言によってカンザス州に移住したが、あまり良くならずさらにアイオワ州に再び移住した。一八七〇年にライニンガーはアイオワの富豪エドワード・シュガートと共同で工場を立ち上げ、後に本社を近くのネブラスカ州オマハに構えた。そして一八七三年、ライニンガー家はオマハに移った。ライニンガーはオマハの実業界で

挿図5 作品の裏部分

急速に事業を拡大し、シュガートとの提携を解消して、独自の事業を展開し一八七六年から一八七九年にはオマハで最大の事業家となっており、中西部中に支店を展開した。しかし、ライニンガーは事業を続けるより、旅行をしたい気持ちを抑えきれず、工場をヘインズ・ブラザーズに売却して家族で旅にたったという。

最初の旅行は一八七九から八一年にかけて、彼の工場を売却してから三ヵ月後のこと、蒸気船シンシア号に乗ってヨーロッパへ向かった。この時は多くの古いフランス派の絵画とすこしの新しい印象派風の絵画を購入したらしい。二回目のヨーロッパ旅行は一八八五年イタリアを中心に、三回目は一八八七年から一八八八年にかけて中東まで足を延ばした。

一八八八年一月にオマハのダウンタウンにギャラリーを開設し(挿図7)、自らがヨーロッパ各地を巡って収集した美術品を一般に公開した。当時のギャラリーの内部を写した数種の絵葉書がジョスリン美術館に残されており、その一枚には壁いっばいに掛けられた絵の中でも大きな《破れたズボン》を正面の壁の左手に見出すことができる(挿図8)。

ライニンガーの最後のヨーロッパ旅行は一八九二年に行われた。特にヨーロッパ美術の中心地から地中海地方を中心に滞在し、さまざまなものを収集した。カイロではエジプトのピラミッドから発掘されたミイラをはじめ陶器類などの美術品を購入。エジプトの前にイギリス、イタリアを回り、エジプトのあとにフランスに短期

挿図6 ライニンガーの肖像

滞在して帰国した。

ライニンガーの一八七九年から一八九二年の間の旧大陸における美術と文化の調査旅行によってオマハに伝統的なものから新しい美術の息吹を感じられるものまでがもたらされた。ライニンガーは都合三ヶ国を訪問し、各国の絵画、アンティーク品を数多く持ち帰り、オマハのギャラリーでは彼の収集品の約四分の一しか収納することができず、ほかは彼の個人住宅の地下室や屋根裏部屋などを含む見つけられるスペースのありとあらゆる部分に収納された。個人住宅部分で多くのオマハの人々はギャラリーには飾られなかった珍しい品々を見て回ることを大変名譽なことと感じていたという。

一八八六年から一八九二年にかけてライニンガーは、オマハ中のたくさんの地区での展覧会の開催などを含む美術に関するさまざまな活動を行っている。無料の展覧会が開かれたのは図書館であった。一九〇七年にライニンガーが没したあととは未

挿図7 ライニンガー・ギャラリー外観

挿図8 ライニンガー・ギャラリー内部
(正面左手に《破れたズボン》を確認できる)

亡人がそのコレクションを引き継いだ、限られた人や親戚の人だけに見せていた。一九二七年、ライニンガーの妻が亡くなり、同年七月一日、メリル・ノースウォールによってパブリック・オークションにかけられた。彼の目論見は地元の百貨店ブランドイーズ・アンド・サンズのジョーシ・ブランドイーズをはじめとしてオマハ地方の人々に買ってもらったことであつたが、目論見どおりだったわけではなかつた。のちにジョスリン美術館を開く、サラ・ジョスリンも購入者の一人であつたが、結果的にはライニンガーの三〇〇点ほどの絵画コレクションのうちおよそ半数がオマハ地方のコレクションになって分散した。一九二七年のライニンガー・コレクションの消失から一九三一年のジョスリン美術館の開館までオマハの人々にとっては再び美術的な環境が失われてしまったということである。

一九二七年のオークションで藤雅三の《破れたズボン》を含む、売れ残つた大きな作品を地元のブランドイーズ・アンド・サンズの百貨店が引き受け、一九五二年にジョスリン美術館に他の五点とともに寄贈して、再び公にされる機会を得たが、残された手紙類を見ると収蔵される時点では展示の予定はなかつたようである。つまり実際に展示されたかは現時点の調査では定かではない。また、一九七二年の記録によると、保存処理として画面のクリーニングとニスのかけ直し、木枠の張りなおしがなされている。

おわりに

今回発見された《破れたズボン》は、日本近代洋画における藤をどのように位置付けることになるだろうか。同じコランに学んだ黒田や久米が温和な外光表現で日本近代洋画史の中できわめて重要な位置を占めていったことに異論はないだろう。この《破れたズボン》を見るかぎり、黒田や久米の作品との共通点を見つけるのは難しい。典型的な古いサロンの絵だともいえる。それは、藤がコランに師事するまえに、工部美術学校でフォンタネージらに学んでいたことと深く結びついているのではないだろうか。工部美術学校で一緒に学んだ浅井忠らがその後、黒田たちが帰国して、その存在が脚光を浴びると、旧派あるいはヤニ派と呼ばれるに至つたが、一八六六年生まれの黒田より一回り年長であつた一八五三年生まれの藤も、二〇歳

代に学んだ対象の見方や表現方法からは抜け切れなかったのだろう。初めからコロンに師事した黒田がやすやすと新しい表現方法を自分のものにしたのとは好対照である。しかし、藤がそれによって劣るという意味ではない。パリに渡ってわずか三年でサロンに入選したのは一定の水準の技量を備えていたからにはかならない。日本人最初のサロン入選をした五姓田義松は、技量は抜群だったと言われるが、一八八一年の「素描・水彩部門」への最初の入選は留学してから不自然なほど早く、師事したレオン・ボナのサロン内の政治的な動きの中で意向によるところが大きかった⁽⁷⁾という意見もある。藤の入選作《破れたズボン》を改めて見ると、当時のジュール・バスチャン・ルパージュやラファエル・コランなどの外光派アカデミシヤンの新しい動向を受け取りきれなかったにせよ、サロンの伝統をしっかりと受け取り、自家葉籠中のものにしていたと言えるだろう。

なお、今後の考察の視点としてはコランとの結びつきの中で、コランがアカデミスム系の画家で最も熱心な日本美術のコレクターであったこと。あるいはコランも陶芸家でセーヴルの工場長であったテオドール・デックの下で、絵付け師の仕事をしていたことなど、藤のその後の展開に何かしらの影響を感じさせるものがある点を検討していくことと、ライニングアの資料を詳細に調査することによって、アメリカへ渡るきっかけなり、アメリカでの藤との接点が見つかるかもしれないことが考えられる。

今後この作品が日本近代洋画を研究する人々にとって重要な資料の一つになることは間違いないと確信している。偶然のこの発見について私が報告することのできる機会を得られたことを、ジョスリン美術館のジョン・ウィルソン学芸部長、レジストラのベネロップ・スミス氏をはじめウィルソン氏と引き合わせていただいた小澤律子氏、岐阜県美術館の山本敦子氏、この報告をする機会を与えていただいた東京文化財研究所の田中淳氏ほか、ご協力いただいた方々に感謝して最初の報告を終わりたい。

註

- (1) 加藤康彦「初期洋画家・藤雅三における西洋写真画法の受容過程について」『大分県立芸術会館研究紀要』一号、二〇〇二年
- (2) 瀧井直子「藤雅三の仕事―アメリカでの活動を中心に―」『近代画説』一四号、二〇〇五年
- (3) 『美術週報』大正六年（一九一七）二月四日
- (4) 『美術』一卷二号、一九一六年二月
- (5) 前掲註3 『美術週報』
- (6) 前掲註3 『美術週報』
- (7) 吉川節子「五姓田義松の一八八一年サロン初入選」『近代画説』一〇号、二〇〇一年

追記

この報告書をまとめている最中にジョスリン美術館のジョン・ウィルソン学芸部長から他館に転任するという知らせを受け取った。思いがけない移動に驚くとともに、今後この《破れたズボン》がどのように処遇されるのか気にかかるところである。

(愛知県美術館)

図版要項

- 一 藤雅三 破れたズボン 一八八八年（明治二一）（原色刷）
- 二 同 同 部分（原色刷）
- 三 同 同 部分（原色刷）
- 四 同 同 落款部分（原色刷）

油彩 画布 縦一八二・九cm 横二四三・八cm 米国 ジョスリン美術館蔵

credit line: Joslyn Art Museum, Omaha, Nebraska

高橋秀治「藤雅三《破れたズボン》発見報告」参照